

氏名	ハディウトモ ドウイ アンゴロ
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第413号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	時間的近接関係を表す複合辞の研究
審査委員	(主査) 沖森 卓也 石川 巧 木村 義之 (慶應義塾大学日本語・日本文化教育 センター教授)

I 論文内容の要旨

論文名……時間的近接関係を表す複合辞の研究

(1) 論文の構成

第一章 研究の目的と方法

- 一 研究の背景
- 二 研究の目的
- 三 先行研究
- 四 研究の方法

第一章 「とたん(に)」

第一節 はじめに

第二節 先行研究

第三節 辞書記述

第四節 新聞の用例

- 四. 一 「Vた」 + 「とたん(に)」
- 四. 二 「その」 + 「とたん(に)」
- 四. 三 「とたんに」

第五節 江戸語における「とたん(に)」

第六節 近代語における「とたん(に)」

六. 一 明治期

- 六. 一. 一 「Vる」 + 「とたん(に)」
- 六. 一. 二 「Vた」 + 「とたん(に)」
- 六. 一. 三 「その/この」 + 「とたん(に)」
- 六. 一. 四 「とたん(に)」

六. 二 大正期

- 六. 二. 一 「Vる」 + 「とたん(に)」
- 六. 二. 二 「Vた」 + 「とたん(に)」
- 六. 二. 三 「その」 + 「とたん(に)」
- 六. 二. 四 「とたん(に)」

第七節 終わりに

第二章 「瞬間に」

第一節 はじめに

第二節 先行研究

第三節 「瞬間」の辞書記述

第四節 現代語における「瞬間」

- 四. 一 「Vた」 + 「瞬間(に)」
- 四. 二 「Vる」 + 「瞬間(に)」
- 四. 三 「その瞬間」

第五節 江戸期における「瞬間(に)」

第六節 近代語における用法

六. 一 明治期

六. 一. 一 「瞬間 (に)」

六. 一. 二 「刹那 (に)」

六. 二 大正期

六. 二. 一 大正期の「瞬間」

六. 二. 二 大正期の「刹那」

第七節 終わりに

第四章 「はずみ (に／で)」

第一節 はじめに

第二節 先行研究

第三節 辞書記述

第四節 現代語での用法

第五節 江戸期において「はずみ (に／で)」

第六節 近代語における用語

六. 一 明治期における「はずみ (に／で)」

六. 二 大正期における「はずみ (に／で)」

第七節 おわりに

第五章 「拍子に」

第一節 はじめに

第二節 先行研究

第三節 辞書記述

第四節 現代語における「拍子に」

第五節 江戸期における「拍子に」

第六節 近代期における「拍子に」

六. 一 明治期

六. 二 大正期

第七節 おわりに

第六章 「矢先 (に)」

第一節 はじめに

第二節 先行研究

第三節 辞書記述

第四節 現代語における「矢先に」

第五節 江戸期における「矢先に」

第六節 近代期における「矢先に」

六. 一 明治期

六. 二 大正期

第七節 おわりに

おわりに
参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文では、ある事象が成立した直後に、別の事象が成立するという意味を表す表現を取り上げて、時間的に近接関係を表す複合辞のうち、名詞に由来する「とたん(に)」「瞬間(に)」「はずみ(に/で)」「拍子(に)」「矢先(に)」の意味・用法について考察する。さらに、現代語の意味・用法をより深く解明するために、江戸期、特に江戸語から東京語にかけての近代語を中心に、その接続の形式および意味の変化についても併せて分析する。

まず、第一章では、研究の目的や方法、先行研究などについてまとめる。これを踏まえて、第二章では、「とたん(に)」について、ル形（現在形）に付く場合、同時性のニュアンスを帯び、タ形（過去形）に付く場合は直後性、継起性が強いことを指摘する。そして、「とたん」は「ちょうどその時」という同時性の意から、次第に「その直後に」という直後性の意味を強く持つようになってきたことを明らかにする。

第三章では、「瞬間(に)」を扱い、漢語「瞬間」は早くても江戸時代末期の成立で、江戸時代までは「またたくひま」などの漢字表記として用いられていたが、その表記が字音読みされて、漢語「瞬間」が成立したとし、それが定着するのは明治中期以降に入ってからであると分析する。そして、前接する形態にはル形・タ形がともに見えるようになるが、前者が同時性、後者が直後性、継起性のニュアンスを伴っていること、また、ル形は動作の未完了を、タ形は動作の完了を表していることを指摘する。

第四章では、「はずみ に/で」について、ル形・タ形いずれにつく場合も、その前件の事態は完了のアスペクトを表すと述べた上で、この表現はもともと、ある事態の成立が影響を与えて別の事態を成立させるという意味が強いもので、原因のニュアンスも感じられるものであったのが、次第に意味を抽象化させて、大正期に入ると、単なる時間の前後関係のみを表す例が見えるようになり、「一瞬」という意味に近い用法を持つようになったことを明らかにする。また、「はずみで」の形も明治時代になると生じたことを確認する。

第五章では、「拍子に」は15世紀から複合辞の用法が見え、江戸時代以前に見られるル形につく用法は多く前件の事態が未完了であると考えられるとする。これに対して、明治期には複数の動きを前件とする例も見えるようになり、物事の関連性を表すことに重点を置くという、「きっかけ」のニュアンスが強くなったと述べる。

第六章では、「矢先(に)」は、江戸期にすでに「に」のない「やさき」の形も見られ、ル形につく形式はある事態の成立した直後に別の事態が成立するという意味で用いられていたことを指摘する。明治時代になると、タ形に付く形式が見えるようになり、これも直後性の意を表したが、その後半になると、ル形につく形式が、ある事態の成立する直前性の意を表すようになり、次第にル形に付く形が直前性の意しか表さないようになってきたことを明らかにする。また、明治時代には「矢先へ」という形も用いられたが、これは口頭語的、俗語的なものであるとする。

最後に、時間的近接関係を表す複合辞は、直後性を表すという意味の面、および、タ形に付くという接続の面で現代語への過程で固定化していったこと、その一方で、「矢先に」においては、タ形に付くかル形に付くかによって直後/直前という意味の違いを持つというように、用法を明確化する方向で発達してきたことなど、総じて表現を合理化させる過程で推移してきたと述べる。

II 審査結果と要旨

複合辞は近代語において発達した言語形式であり、近年この分野の研究は大いに進展してきた。ただ、現代語の意味用法を解明する上で、その歴史的な推移を明らかにすることは必須の課題であるにもかかわらず、江戸語から東京語へ、近代語から現代語へという史の変遷を踏まえた論考はいまだ数少ない。本論文は、そのような未開拓の分野に果敢に取り組み、大きな研究成果をあげた好論であると評価できる。

まず、時間的にきわめて近接するという関係で複数の事態が生起するという表現を研究の対象とするが、名詞に由来する複合辞は、現代語では「～したとたん(に)」「～した拍子に」などというように述語のタ形(過去形)に付くが、これらのタイプは江戸時代においては「はずみに」を除き、他はすべてル形(現在形)に付くことを明らかにする。このような指摘はこれまでにないもので、きわめて価値が高い。このようなタイプを、名詞に由来する複合辞を一括して研究を進め、もともとは単なる連体修飾として、もしくは同時性のニュアンスを表すものとしてル形接続であったものが、江戸語以降、特に、明治に入ってタ形に付くのは、前件の事態が完了するという意味を文法的により明確にすることに基づくものであるという見解も妥当なものであると認められる。

第二に、ル形接続とタ形接続の意味上の違いを明確に分析し得たことは大いに注目される。「瞬間」は「またたくひま」などの漢字表記を字音読みして成立し、明治の中頃から一般化したことを踏まえて、ル形に付く場合に同時性、タ形に付く場合に直後性、継起性のニュアンスを帯びることを明らかにする。また、「とたん(に)」も明治期におけるル形接続とタ形接続の間で、同時性と直後性、継起性というそれぞれ表現上の違いがあると指摘したことも、言語変化の傾向を類型化しえた点で有意義である。

第三に、複合辞の意味用法について、従来の見解を正すことができた点である。「やさきに」については、直前性の意味を表すものと分析されてきたが、本論では、江戸時代にはル形に付く場合は、ある事態の成立した直後に別の事態が成立するという直後性の意味を表したが、明治時代になると過去形に付く形が見られるようになり、それが直後性を意味するようになり、ル形に付く形式は直前性を表すようになったというように、その接続関係と意味用法の史の変遷を解明し得たことも高く評価される。

それぞれの複合辞に関する分析および考察は、各時代における意味用法、その消長を丹念に追っており、その論述は実証的で説得力がある。また、複合辞だけでなく、文頭に接続詞的に用いられる「そのとたん」「その瞬間」などの形式にも言及し、その接続関係を幅広く分析しようとした点も注目される。ただ、江戸時代から明治時代前期にかけての口語的文献の少なさ、そして偏りという資料的制約もあって、その全貌が十全には捉えにくいところもあり、また、資料の選定、分析方法にもやや手薄な点があることも否めない。今後の課題として残されている点はあるものの、本論文は、複合辞の史の変遷について、各種の資料を調査して、それぞれの複合辞の意味用法、および接続などの史の変遷を丹念に分析し適切に記述し得ている。とりわけ、接続の形式に関する消長について新たな知見が得られたことなど、その研究の価値と意義は大きく、質の高いものであることを裏付けている。